

## 本学学生の環境の認識について

—特に飼育・栽培の経験と関心—

### The Understanding on Environmental of our College Students

—On the Experience and Interest of Breeding (Animals) · Cultivation (Plants)

村 尾 勝

Masaru Murao

#### はじめに

平成12年4月から施行された幼稚園教育要領において、身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり大切にしたりする。<sup>1)</sup> また保育所指針の教育内容でも同様に示されている。<sup>2)</sup> 特に愛護の精神を培うためには、自らが動物や植物に親しみを持ち、なおかつ飼育や栽培をすることにより、より興味、関心が高められる。そこに愛護の精神が人間性豊かな子どもの育成があるのではないかとと思われる。子ども達が身近な動植物に親しみ、興味を持つようになるには、なによりも、保育者自身が幅広い知識と関心を持っていることが大切である。

そこで筆者は、将来保育者になるべく学生を対象に、自らが動植物に対してどの程度の関心を持ち、幼少時における飼育、栽培の経験と将来像について調査したので報告する。

#### 調査対象

調査は2005年9月と2006年9月に実施した。回答者は本学こども学科学生で有効回答者数103名(2005年、男性8名、女性42名・2006年、男性11名、女性42名)であった。また分析方法は百分率でおこなった。

#### 調査方法

調査はアンケート方式でおこなった。調査の内容については下記に記載する

#### 『環境』実態調査

性別 男性 女性

無記名

質問1. あなたの育った場所はどちらですか。

1、小都市 2、農村部 3、漁村部 4、住宅地域 5、その他

質問2. あなたは「環境」領域の特にどの分野に関心を持っていますか。

- 1、動物（飼育） 2、植物（栽培） 3、天体・気象 4、数量・図形 5、科学遊び

質問3. 将来、あなたが保育者になった場合「環境」分野で、特に何の分野に力を入れたいですか。

- 1、動物（飼育） 2、植物（栽培） 3、天体・気象 4、数量・図形 5、科学遊び

質問4. 動物を飼育したものに○印をつけて下さい。（幼少時）

- 1、イソギンチャク 2、カタツムリ 3、モンシロチョウ 4、かいこ 5、スズムシ  
6、アメリカザリガニ 7、オタマジャクシ 8、カエル 9、カメ 10、キンギョ  
11、メダカ 12、小鳥（一般） 13、ニワトリ 14、コオロギ 15、バッタ 16、モルモット  
17、リス 18、ウサギ 19、カブトムシ 20、ハト 21、カニ 22、ドジョウ 23、コイ  
24、フナ 25、熱帯魚 26、その他

質問5. 植物を栽培したものに○印をつけて下さい（幼少時）

- 1、アサガオ 2、ホウセンカ 3、ひまわり 4、チューリップ 5、ヒヤシンス  
6、クロッカス 7、グラジオラス 8、ダリア 9、カンナ 10、マツバボタン 11、百日草  
12、ヘチマ 13、カボチャ 14、ひょうたん 15、サツマイモ 16、トマト 17、ナス  
18、キュウリ 19、ジャガイモ 20、ハツカダイコン 21、ケイトー 22、サルビヤ  
23、パンジー 24、その他

質問6. 水栽培をしたことがありますか。

- 1、ある 2、ない

質問7. あるならば何の植物を栽培しましたか。

- 1、ヒヤシンス 2、クロッカス 3、チューリップ 4、スイセン 5、ジャガイモ

質問8. 次の小動物のうち、手でさわったことのあるものに○印を付けて下さい。

- 1、カエル 2、オタマジャクシ 3、アメリカザリガニ 4、カブトムシ 5、カタツムリ  
6、ヤドカリ 7、セミ 8、カニ

質問9. 次の動・植物のうち、実物をよく知っている（識別できるもの）ものに○印をつけてください。

- 1、タンポポ 2、カタバミ 3、ヒルガオ 4、シソ 5、オオマツ 6、カエデ  
 7、レンゲ 8、イチョウ 9、クヌギ 10、サルスベリ 11、クスノキ 12、ケアキ  
 13、ポプラ 14、キョウチクトウ 15、カラスウリ 16、ススキ 17、ウメ 18、ツクシ  
 19、フキ 20、パンジー 21、サクラ 22、スイセン 23、ナズナ 24、ダイコン 25、ツバキ  
 26、キンセンカ 27、ツツジ 28、アヤメ 29、スマレ 30、ユリ 31、ハルジオン  
 32、アメンボ 33、タニシ 34、ゲンゴロウ 35、ミズスマシ 36、シオカラトンボ  
 37、クロオオアリ 38、アシナガハチ 39、ミノムシ 40、イナゴ 41、キリギリス  
 42、コオロギ 43、ミノガ

質問10. 将来あなたが保育者になった場合、幼児と共にどんな動物を飼育したいですか。質問4より選んで下さい。（番号を記入して下さい）

質問11. 将来あなたが保育者になった場合、幼児と共にどんな植物を栽培したいですか。質問5より選んで下さい。（番号を記入して下さい）

### 調査結果と考察

図1は調査した学生がどのような生活環境の中で育ったかについて表したものである。

今回の調査目的は幼少時に飼育、栽培の経験を重視した物であり、この図からいえることは農村部が全体の40%であった。次いで住宅地域24%、都市部が23%であった。

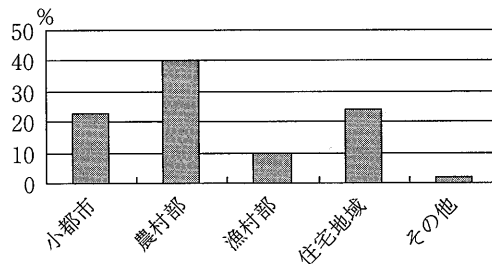


図1. 育った地域

幼稚園、保育所の中で5領域の1分野である「環境」の中でどの分野に関心を持っているか（図2）またどの分野に力をいれたいか（図3）について示した。

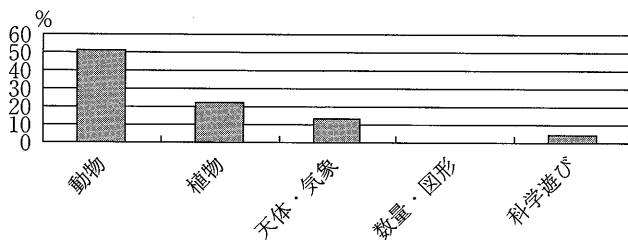


図2. 「環境」分野の関心度

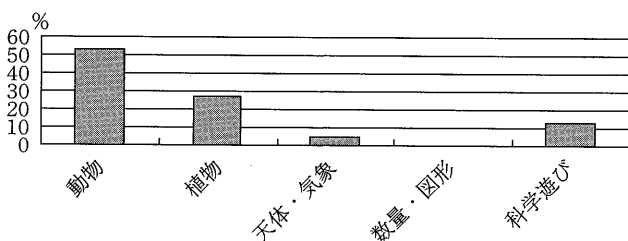


図3. 「環境」分野での指導

図2から言えることは、動物の飼育に関心を持っている学生が約半数の51%であった。その他、植物の栽培が22%であり、また天体、気象面（13%）や科学遊び（12%）は比較的少なかった。

図3については将来現場でどの分野に力を入れたいかについては、動物の飼育は53%、植物の栽培27%、科学遊びが13%であった

将来の取り組みについては、動植物の飼育栽培の指導が両者で80%であった。また科学遊びについての指導は少なかった。

「環境」の領域の内容はきわめて広い。自然現象を中心に、飼育や栽培、作ることなど特に実践や体験の学習であることから時間もかかる。しかし愛護の精神、愛情を育む心、根気強さ、我慢強さ、情緒の安定には欠かすことのできない領域でもある。豊かな人間性を育み、愛護の心を育てるには動物の飼育が最適である。直接、動物にふれることにより、生きていることの証により、より身近なものとなり自分と同等の立場から物事を見つめることは大切である。<sup>3)</sup>

また保育園や幼稚園の現場では作ることに對する意欲の減退が叫ばれており、想像性、創造力を豊にする上において多くに取り入れてほしいと思われる。<sup>4)</sup>

さらに数量、図形に関しては殆ど関心を持っていないのが現状である。保育指導法のなかの内容に日常生活の中で数量や図形などに興味や関心を持つと示されている。<sup>5)</sup>しかし、保育園、幼稚園では小学校と違い単科の領域ではなく総合保育として、他の領域との連繋の中で取り入れて指導す

ることが最適でそのことは将来の保育者になられる学生は念頭において頂くことが大切であると思われる。

幼少時の動物の飼育についての経験度を図4-1、図4-2に示す。

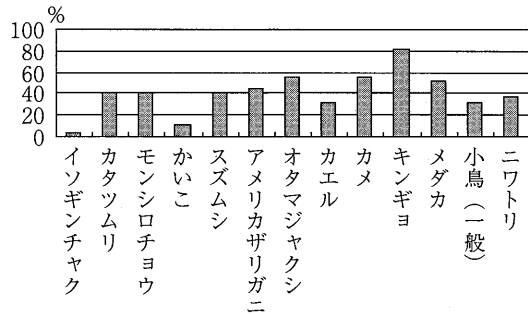


図4-1. 動物の飼育度

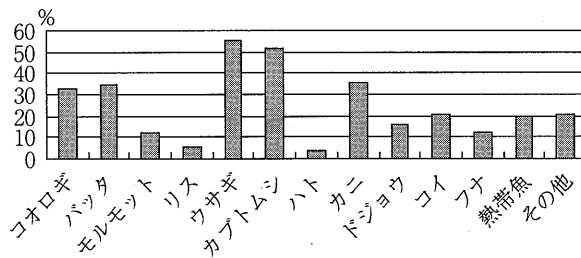


図4-2. 動物の飼育度

この調査結果から、よく飼育した動物はキンギョ (81%) カメ (56%) オタマジャクシ (56%) うさぎ (55%) カブトムシ (52%) メダカ (51%) であった。逆に飼育しなかった動物はイソギンチャク (4%) リス (6%) ハト (4%) であった。キンギョは比較的飼育しやすく、また価格的にも安くこのような結果となったのではないと思われる。過去の調査した結果でも同様であった。<sup>6)</sup> オタマジャクシは飼育したが、カエルについての経験は32%と低かった。カエルは後足、前足がでた、すなわち変態の時点で川や沼に離したのか、愛護の精神からの観点からも大切であると思われる。いずれにしても飼育については地域性的の問題もあるものと思われる。幼少時の植物の栽培についての経験度を図5-1、図5-2に示す。

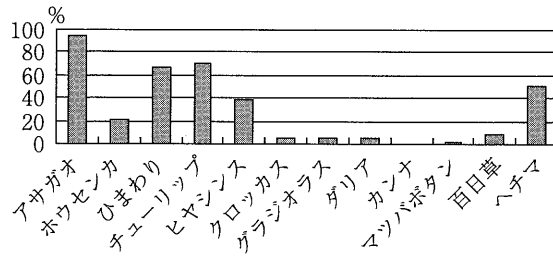


図5-1. 植物の栽培度

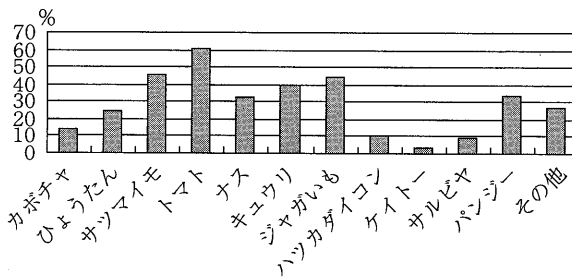


図5-2. 植物の栽培度

この調査結果からよく栽培した植物はアサガオ (95%) チューリップ (71%) ひまわり (67%) トマト (61%) ヘチマ (51%) であった。逆に栽培しなかった植物はカンナ (0%) マツバボタン (2%) ケイトウ (3%) あった。

アサガオ、ひまわり、チューリップはそれぞれの保育園、幼稚園にて栽培しておりその経験を生かして活用してほしいと思われる。この図から園芸植物は多くの学生が経験しており、蔬菜類 (7種類) の経験率 (35.4%) は比較的、経験率も低かった。

水栽培の経験度を図6に示す。

ま、水栽培の経験者でどんな植物を育てたかについて図7に示す。

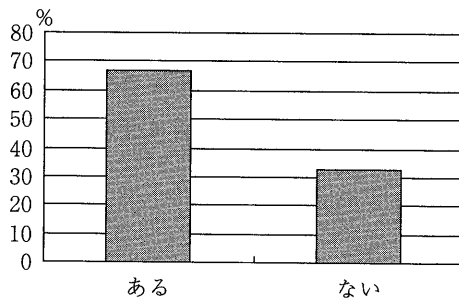


図6. 水栽培の体験度

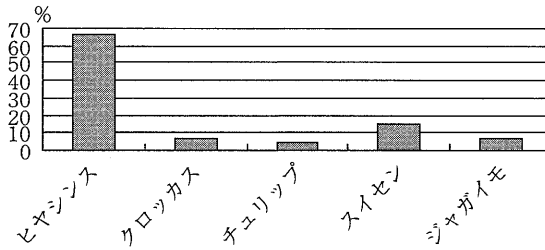


図7. 水栽培の種類

水栽培をしたことのある学生は67%であった。

秋から冬にかけて栽培する植物の種類も比較的少なく、また寒くなり、外でおこなう作業も困難である。そこでおこなわれるのが水栽培である。

水栽培は普通の栽培では見ることのできない土中の根の様子がわかるので幼児に体験させる事は大切であるように思われる。

水栽培を経験した中でヒヤシンスが66%（土栽培では66%）で圧倒的に多かった。次いでスイセンが15%であった。

いずれにしても水栽培のねらいは、根の伸び具合に注意を向けさせる。根が先に伸び、後に出芽するといった所を観察させるとともに、これだけの根が1本の幹を支えているという概念を指導するところに重要な意義がある。<sup>7)</sup>

小動物に触ったことのある割合について図8に示す。

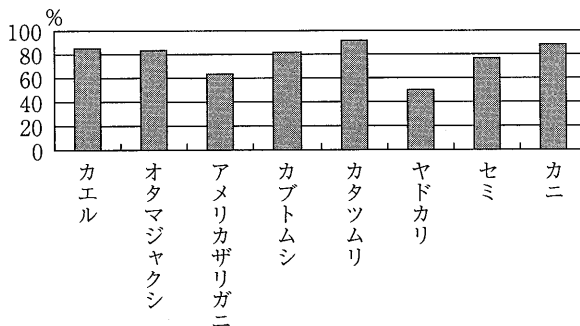


図8. 小動物の触覚度

この図から多くの学生が手で触っていることがいえる。カエル、オタマジャクシ、カブトムシ、カニについては80%以上の学生が触っている。動物の指導については、五感を多に働かせ、生きた事物に触ることにより、愛護の心が生じるように思われる。子ども達は、虫をはじめとする小動物に触ったり、土いじりが大好きである。将来、保育者になったとき、子ども達とともに体験をして頂きたいと思う。

草木の植物を知っているかについて図9-1, 図9-2に示す。

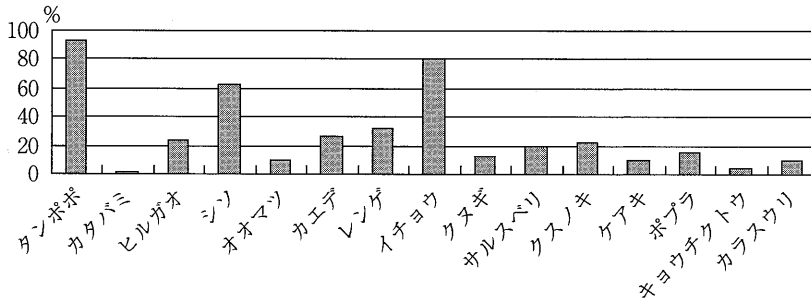


図9-1. 植物の認識度

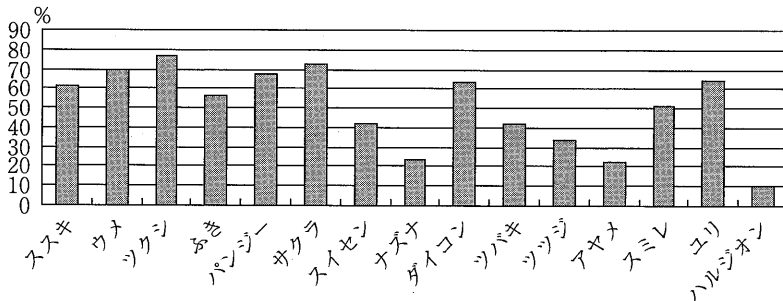


図9-2. 植物の認識度

60%以上の学生が知っているとした草木ではタンポポ (93%) ツクシ (77%) パンジー (67%) ススキ (61%)、花ではユリ (64%)、根菜でダイコン (63%)、葉菜でシン (62%)、木ではイチヨウ (80%)、サクラ (73%)、ウメ (70%) が多かった。

逆にポプラ (15%) やケヤキ (10%) など、これらは多くの学校で植えられており以外と知らない学生が多かった。

動物を知っているかについては図10に示した。検体12種類の中では特にアメンボが80%、コオロギ70%、またミノムシも50%認識していた。

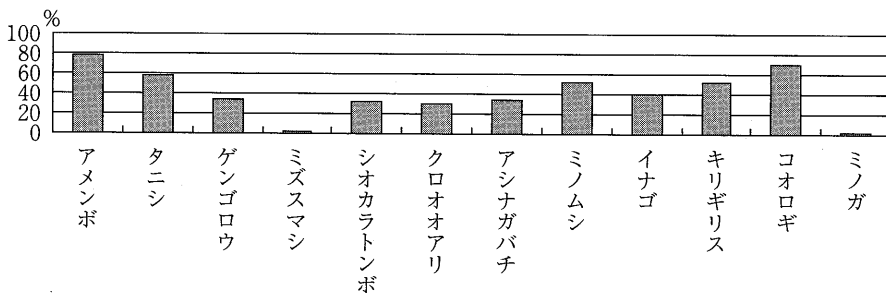


図10. 動物の認識度



将来保育者になった場合、幼児とともにどんな動物を飼育したいかを図11-1と図11-2に示す。

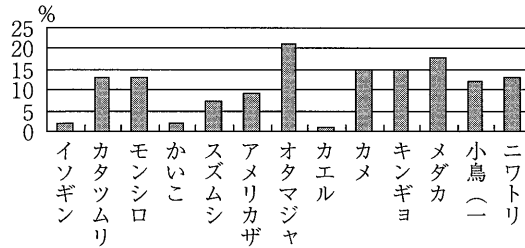


図11-1. 飼育したい動物

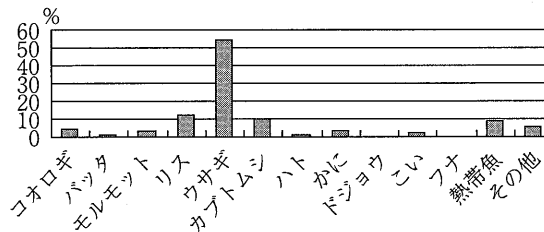


図11-2. 飼育したい動物

これらの調査結果から、ウサギの51%が圧倒的に多かった。その他オタマジャクシ (21%) メダカ (18%) カメ (15%) キンギョ (15%) カタツムリ (13%) モンシロチョウ (13%) などであった。ウサギは過去の調査では60%であった。<sup>8)</sup> 多くの幼稚園、保育園で飼育している一番人気のある動物ではないかと思われる。特に外観が美しくほ乳類の典型として扱いやすく飼育しやすい動物である。最近では飼育のえさも市販の固形飼料を与えているのが現状である。本来ウサギは草食動物である。草の名前も覚えるだろうし許せるなら草を与えて頂きたいと思う。オタマジャクシは飼育にしているが、しかし卵、オタマジャクシ、カエルの変態の過程を観察させるのも良い機会であるように思う。

将来保育者になった場合、幼児とともにどんな植物を栽培したいかを図12-1と図12-2に示す。

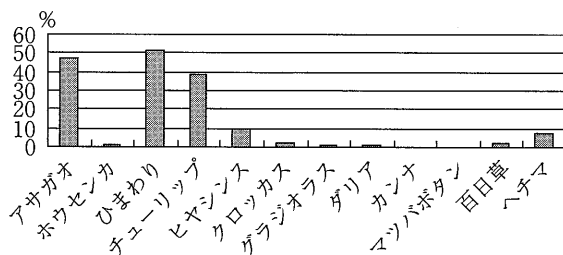


図12-1. 栽培したい植物

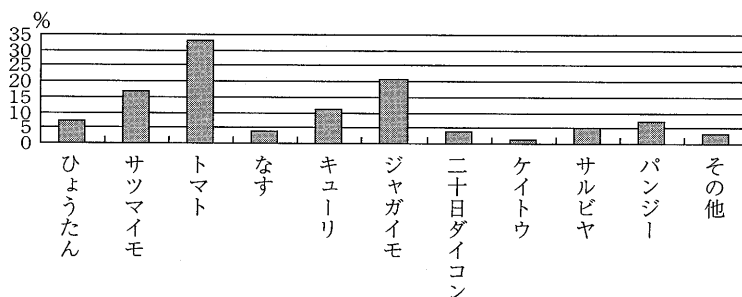


図12-2. 栽培したい植物

これらの調査結果からヒマワリ (51%) アサガオ (47%) チューリップ (39%) トマト (33%) が多かった。アサガオは1人1鉢をしている幼稚園、保育園が多く見られる。

植物の栽培は時間がかかるものの、種をまくことにより花が咲き、また、各自が世話をすることにより愛着心もわき、今欠けている感情の欠如も取り戻す事ができるのではないと思われる。

最近、食に関することが多く取り上げられている。<sup>9)</sup> 政府も食育基本法が平成17年6月1日に成立し、また保育の分野でも食育の推進、食育の取り組みなるものが健康面で上がられている。<sup>10)</sup> 食に対する意識付けは何といっても自分達が植物(野菜)を栽培し、それを調理して食べる、地産地消は大切である。幼稚園、保育園でも食育に関する教育も取り上げられている。<sup>11)</sup> 自分達が栽培する事により季節感を取り戻すこともできる。今回の調査では、トマトを栽培したい (32%) と多くの学生がおり、今後はキュウリ、ナスビなど栽培して頂きたいものである。

本来プランターでも充分栽培できるが、事情により困難な場合は、近くの農家の方をお願いするのもいい方法である。栽培して食べる教育いわゆる食教育の大切さを肌で感じる事こそ真の食育につながるのではないと思われる。

動物を飼育し植物を栽培することは生命の大切さを知るためには必要である。好奇心旺盛なこの時期に生命あるものに命の大切さを受け止める心、そして生きる力を養わせることが大切であるように思われる。

## ま と め

本学こども学科の幼児期の生活環境は農村部で育った人が40%であった。

環境分野の関心、および将来どの分野に力を入れたいかについては動物の飼育が全体の50%であった。ついで植物の栽培が約30%であった。このことは愛護の精神を培う上においてよい傾向である。

飼育したことのある動物については、キンギョが圧倒的に多く全体の80%であった。その他オタマジャクシ、メダカ、ウサギ、カブトムシも50%以上であった。

幼少時、栽培したことのある植物については、アサガオが95%で圧倒的に多く、その他ヒマワリ、チューリップ、野菜類ではトマト、ジャガイモ、サツマイモも多かった。

水栽培したことのあると答えたのは全体の67%であり、また種類はヒヤシンスが多かった。

小動物を触ったことに対する調査では、ヤドカリ以外は積極的に触れており、これは五感教育にはよい傾向であると思われる。

知っている植物については、タンポポ、イチョウ、ウメ、桜などが多かった。

知っている動物についてはアメンボとコオロギが多かった。

将来、幼稚園 保育所などで勤務し飼育したい動物は、ウサギ、オタマジャクシ、メダカ、キンギョが比較的多く、また栽培したい植物ではアサガオ、ヒマワリ、チューリップ、野菜類ではトマト、ジャガイモ、サツマイモであり、特に食育教育指導の最高の教材であるかと思われる。

以上の結果から、調査学生の動植物に対する関心は比較的高いと思われる。

動物や植物を育てることは、その作業を通して、幼児に動植物を身近に感じさせ、これに対して興味や関心をいだけせ、その過程で動植物を理解し、これらに対して愛護する心を養うことにねらいがあるものと思われる。

## 参 考 文 献

- 1) 幼稚園教育要領「環境」文部科学省 2000 4
- 2) 保育所保育指針「環境」厚生労働省 2000 4
- 3) 村尾 勝 こどものための「環境」指導 青山社 2006、79～83
- 4) 村尾 勝 こどものための「環境」指導 青山社 2006、14
- 5) 幼稚園教育要領（文部科学省） 保育所保育指針（厚生労働省） 2000、4
- 6) 村尾 勝 本学学生の自然の認識 近畿大学豊岡女子短期大学紀要、1982 No10 149
- 7) 村尾 勝 こどものための「環境」指導 青山社 2006、101～103
- 8) 村尾 勝 本学学生の自然の認識 近畿大学豊岡女子短期大学紀要、1982、No10 152
- 9) 早川克己 食育の急所 日本消費者協会 2005 特集号 38
- 10) 天野珠路 保育行政の今日的課題 2006、4
- 11) 早川克己 食育の急所 日本消費者協会 2005 特集号 4～24

